

審査の結果の要旨

氏名 前山悦子

本論文は、わが国で在宅緩和ケアを専門的に提供する希少な1施設の支援を受ける終末期がん患者と主介護者90組を対象に、在宅緩和ケア開始時から開始早期の状況、および終末時の状況を経時的に記述し、在宅緩和ケア推進を具体化する上での問題点や課題を明確にした。在宅で死を迎える患者とその主介護者への支援に関して以下の知見を得た。

1. 在宅緩和ケア開始時から、痛みや不快、日常生活に問題があると感じる患者は多く、また、主介護者の不安は高かった。患者への医療や生活支援、および主介護者への不安への対処の必要性が高い中で在宅緩和ケアに移行する状況が示された。
2. 在宅緩和ケアが関与しない時期の在宅療養患者の症状緩和の不十分さが示され、外来での症状マネジメントの困難さが推察された。
3. 全体として、在宅緩和ケアの紹介の遅れや移行に関する支援の不足が課題にあげられ、在宅緩和ケアへの移行の障害となる要因を同定するとともに、継ぎ目なく緩和ケアが提供されるような体制構築の必要性が示唆された。
4. 在宅緩和ケア開始早期における全般的なQOL値に有意な変化はみられなかった。だが、個人の変化として、全般的なQOL値が「向上」した例があり、在宅緩和ケア導入の肯定的な評価の一つととらえられた。
5. 終末時にむけて、患者のADL低下は在宅緩和ケア開始早期から生じ、多様な身体症状を複数有しながら生活していた。患者の生活や症状の変化に対して、定期的なモニタリングを行い、対応できる体制を整備することが必須であると考えられた。

6. 主介護者の睡眠状況や体調は、終末時だけでなく開始早期から悪化しており、また、介護への不安は開始早期に軽減するが、終末時に再度悪化していた。在宅緩和ケア導入後も、主介護者の体調管理と介護不安への対応の困難さが示唆された。人の死を在宅で看取った経験のない家族が多い中、患者の死を迎えるための家族の心の準備を支援し、死を看取る力を強めるような働きかけが重要である。主介護者の休息の確保や介護不安への対応等、医療だけでなく介護・福祉職との協働が課題としてあげられた。

7. 本研究により明確化された問題や課題の解決、個々の多様なニーズに対して地域を拡大した検討が求められる。

以上、本論文は、わが国で在宅緩和ケアを専門的に提供する施設が少ない現状を踏まえ、在宅緩和ケア開始時から終末時まで、死に向かう過程にある患者と家族の現況を前向きに継続的に情報収集・分析した点で独創的であり、在宅緩和ケア推進を具体化する上での問題点や課題を時期別に定量的に明確にした点で臨床上の有用性も兼ね備えており、学位の授与に値するものと考えられる。